

日本学術会議総合工学委員会・機械工学委員会合同
工学システムに関する安全・安心・リスク検討分科会
老朽及び遺棄化学兵器の廃棄に係るリスク評価とリスク管理に関する検討小委員会
(第26期・第4回) 議事要旨

1. 日時 令和7年1月7日(火) 13:00~15:00
2. 会場 ハイブリッド会議 (Zoom)
3. 出席委員 新井 充 小野 恭子 川原 志郎 岸田 伸幸 関 実 高木 和広
古崎 新太郎 宮崎 恵子 山内 博 山口 芳裕 横田 真 (50音順)

4. 議事要旨

定刻に小野委員長が議長となって開会を宣し、定足数の充足を確認して議事に入った。

1) 前回議事要旨の確認

小野委員長は前回議事要旨(資料1)の確認を求め、一同異議無く了承した。

2) 安全工学シンポジウム2025オーガナイズドセッションについて

小野議長は安全工学シンポジウム2025[6/25(水)~27(金)]のオーガナイズドセッションへの参加について、昨年の参加実績(資料2)を示して審議を求めた。

小野委員長) 今年度も OS 1 件で参加したいとの内意を親委員会には伝えてある。内容を決めていく必要があるが、今期は意思の表出の編纂スケジュールが早まり、安全工学シンポジウムの約3か月後の9月には出さなければならない。今期最後の1年間は表出した意思のアウトリーチ、お知らせ活動を行うべしという方針が出ている。このため、安全工学シンポジウムで表出予定文書内容の一端を話しても良いのではないかと考えた。

岸田幹事) 過去にはそうした形で表出前に一部紹介したり、表出後に改めて講演したりしたこともあるので差し支えない。

関委員) 安全工学シンポジウムでセッション開催するのは当委員会のミッションなのか? 昨年講演した感想では、一般参加者がリモート含め余りにも少なく社会に対する訴求力が小さいと思った。社会へ訴えかけるなら、別の良い方法を準備して文書表出後に行う方が良いのではないか。ミッションでなければ三か月前に無理してやることはないと思う。

小野委員長) セッション開催はミッションではない。その考えもリーズナブルと思う。

岸田幹事) ミッションではないが、親分科会の強い要請を受けてという感覚で行っている。ODA 不祥事があって注目を集めていた2007年頃は当委員会・親分科会が主催する独立したシンポジウムを開催して相当数の一般来場者を集めた時期もあった。その後落ち着いたので安全工学シンポジウムに合流した経緯がある。

関委員) 情性でやっているなら文書を作成しなければならない差し迫った時期に無理する

ことはないと思う。

山内委員) 定期異動で頻繁に交代するお役人に、この委員会の古崎先生、藤原先生など歴代委員等をはじめ何度も物申してきた。特に世界情勢を伝える朝比奈先生と処理現場に赴いて指導した中村先生の寄与は大きい。シンポジウム参加者の問題は同感で何とかしたいと思うが、長年関わってきた少数精鋭として機会があれば登壇して話すことは吝かでない。

関委員) 文書公表前の講演になるとどうしても抑制的になる。作成段階でやるべきなのは、様々な意見を膨らませ共有した上で、どこ迄を表出するのが良いか話し合うこと。それは非公開の場で行って議論を深めてまとめたものを公表すればその趣旨に沿うのではないか。三か月前に中途半端な形で講演するより、どう広報するか考えた上で進めた方がよい。

山内委員) 私と関先生の意見に大きな乖離はない。一般から見ると学術会議が何をやっているか分からないので OS をやってきたが、中途半端な広報をするより国際学会レベルの論文に仕上げ世界に公表した方がよい。提言書でも不十分と前々から思っている。同意。

新井副委員長) 今の学術会議の組織体制だと、当委員会の発表の場は安全工学シンポジウムしかないと思う。もちろん意思の表出はあるが全然役割が違う。一般の人が割と入れるシンポジウムは学術会議に求められているプレゼンスを示す意味では出さなければしょうがないと考えてきた。只、惰性ではないかという指摘は受け止めて考えないといけない。

小野委員長) 但し、今期は意思の表出手続きが前倒しされ、物理的にも割とタイトになった。9月に出す内容の生煮えの状態のものを我々演者が話すことが良いのかどうか考えているところ。翻って今期最後の1年間でのアウトリーチに注力するという考え方もあると思う。

宮崎委員) 安全工学シンポジウムは日本学術会議が持っている社会に発信する幾つかの手段の一つです。学術会議のやり方としては公開シンポジウムがあり、安全工学シンポジウムはその一つで、的を絞ったものをやりたければ公開シンポジウムを独自に申し込むことができる。安全工学シンポジウムは30余学会が参加し7学会持ち回りで幹事を勤める大規模な会議なので当委員会 OS が目立たない懸念はあるが、様々な参加者へ興味を持って貰うには良い機会と思う。意思の表出については、会員の任命拒否問題から並行して日本学術会議が何をしているか分からないという批判があり、前期は査読の強化が図られた。学術会議の諸委員会は会期3年間で委員を任用し直す建前なので、期末に意思表出すると建前上関係のない次期委員がフォローアップすることになる問題を解決するため、小野委員長説明の通り会期が終わる1年前に意思表出しようというスケジュールになっている。色々流れはあるが、目的に合った方法を小委員会で決めて実行するのが大事である。もう一点、小委員会の上に分科会があり、その上に親委員会、更に第三部があり、夫々の段階でこの小委員会の意思の表出を日本学術会議として出すことの意義を認めて貰わないと出せない。それを意識する必要があるし、辻分科会長の同意を得ないといけないが、親分科会と合同の会合を開いてお互いの理解を深めた方がよい。そうしたことも頭において頂きたい。

小野委員長) 前からの惰性というのが推奨されない流れになってきたと理解される。やる

とすれば今後伸ばすべき技術等に光を当て、朝比奈先生に世界の動向をインプット頂いて90分という感じだが、生煮えで一寸というなら見送るのも有りかなと考える。

岸田幹事) 一般の方が来るなら、ウクライナ戦争でロシアの催涙ガス使用が米国防総省により確認・公表されている。シリアもアサド亡命で隠しようが無くなった。そうした化学兵器への関心が世間一般で高まっていそうだが、当委員会には朝比奈先生の海外事情しか対応できない。一般参加者のそうした関心に応えるには未だ生煮え状態かと懸念している。

高木委員) 自衛隊出身の秋山元委員に化学戦専門家をご紹介頂くというのはどうか。

小野委員長) 戦争絡みのそんな話題を聞くことは殆どない。誰か頼める人はいるだろうか。

山内委員) 秋山先生関係で自衛隊最先端の大宮の化学学校関係者にどの位情報開示して貰えるかという政治的問題。正式に相談すれば不可能ではないがハードルは非常に高い。

関委員) 話が発散してきた。老朽・遺棄化学兵器処理リスクの委員会だが関心が現代の化学兵器問題に及んでいるなら何をどう話すか予めしっかり合意しておかないといけない。

何を意見表出するか固まらない内に現代の議論を一般参加のシンポジウムで行うのは疑問。

小野委員長) 話が次の議題に及んでしまってきたが、委員会メンバーは今後の化学兵器問題に強い関心があるが、意見表出にまとめるのは過去20年余の活動の集大成になると思う。

残された課題のところで今後の問題について指摘しようというのが委員長の考えである。

今回の安全工学シンポジウムの OS 提案は見送ってよいかと考えている。今回スケジュールが変わったので、意見表出をしっかりとまとめてから来年度のシンポジウムに OS 参加するということかどうかと思う。山内先生如何ですか。

山内委員) 同意。内容豊富にして来年参加した方が大きな責任に応えられると思う。世界的には中国を含め寧ろ情報が多すぎるので、しっかりとまとめて来年やらせて頂きたい。

岸田幹事) 安全工学シンポジウム2025は今回の表出文書の審査プロセス中の開催になる見込みなので、内容をしっかりと固めることが優先されることは間違いないところ。

横田委員) 表出する内容をどうするか決めてから対外的に議論すべきなので今回は見送りで良いと思う。それと同時に私が関心持っているのは前々から話している体制論。担当室と環境省が連携する体制を作っていくことが重要で、そうした提言が出来ればと思う。関先生へのお伺いだが、担当室の方でそうした議論が出たり、出る雰囲気はあるだろうか？

関委員) 担当室は目の前のハルバ嶺事業の完遂という一大事に手一杯で、そうした議論には及んでいないと思われる。そういう考えを持ち込んでみるのも有りかとも思う。

古崎委員) 今年度安全工学シンポジウム見送りは同意する。

3) 今期意思の表出文書の編纂について

古崎委員) 意思の表出文書は委員長概要案をみて付け加えると、ハルバ嶺処理事業は2027年終了予定だが、その他、各地で行われている事業がいつ終わるか分からない状況についても少し書いた方が良いと思う。新しい化学剤が出てきている等の問題は将来課題に書いておきたい。学術会議としては提言を出すのが一つの仕事なので、勉強会で終わらずに、

提言は出来れば提言で出したいと考える。

小野委員長) 今のご意見は、OPCW の査察の下で中国での探査と処理を進めているけれど出口が見えないという、資料3 意思の表出目次2 項目に該当する。目次には課題が多く書いてあって、横田委員の体制論も入っている。1 項目は技術項目が多くて、2項目は割と一般に知られていない課題が多く、この際だから書いておく内容が多い。事実をしっかりと書き込んで、打ち込みたい先である省庁、室と課題を共有するのが委員長案のイメージ。目次の細目を執筆者に割り振って書いて貰う形で進められるだろうか。

岸田幹事) この目次は上がっているコンテンツを項目にまとめた段階で、特定執筆者に当てたり、章立てとして順序を考慮したものではない。

小野委員長) アーカイブの部分は本事業の実績を淡々と書く部分。それだけでかなり貴重。環境省のウェブサイトも貴重なので、リンクとか再録とかバックアップ方々取り入れたい。

山内委員) これまでの意思の表出の経験からだが、執筆プラットフォームがないと恐らく書けないし、分担も出来ない。夏迄のスケジュールで書くなら、今から緊急に目次と文書仕様を取込んだ執筆プラットフォームを作らないと駄目になる。然も、この委員会の実績を踏まえる必要があるので過去の意思の表出を全て読み切って、どんな課題と意思表出の流れを経て今回の提言に至ったかを書く必要がある。それは経験ある限られた人しか出来ない。

岸田幹事) 以前の安全工学シンポジウムで当小委員会表出文書を総覧した報告があるので、その予稿を下敷きに、誰か相応しい委員に執筆を依頼したら良いのではないか。

山内委員) また、各項目の字数、頁数も示して欲しい。文書の構成、特に本文と付録を分けた場合に統合する作業で苦労したことがある。明確なプラットフォームが必要になる。

小野委員長) それでは、執筆者を割り振れる項目での目次と、それぞれの字数迄分かる形で執筆プラットフォームを作ります。岸田幹事お願いします。事務局は現在の学術会議の表出文書テンプレートと、付録の分量制限有無について調べて教えて下さい。執筆者はある程度意識して目次を作ったので、それを反映させて依頼していきたいので宜しく。

山内委員) 年末にかけてメールで幾つか詳細なやり取りもあったが、今回どんな提言にするかの明確なイメージが当小委員会で出来上がったことが未だないので動きようがない。またもう一点、老朽化学兵器について付録で書くのか、将来の問題としてまとめの章で書くのかははっきりしない。基本的に付録は読み難いので本文中でしっかり方向付けした上で構成しないと、査読段階で苦労することになるだろう。

小野委員長) 意思表出文書の主張の方向性は、私は独立にあっても良いと考える。課題について余り擦り合わせが出来ていないが、アーカイブなどこれ迄書いて表出してきた課題から先ずは持ってくるというイメージで、コピペを恐れず自分なりこれ迄の議論を踏まえて、自分の言葉で資料3 目次案は書いている。

山内委員) 今回の提言で私が言っておきたい一番目は、今の担当室が将来この問題でどんな事業をするのかということ。どういう作業をすることになって、日中間でどんな問題に

困窮してくるのか。そこが一丁目一番地。それに対して、過去この委員会がどんな活動をしてきたが十分でなかった、ということを書き置いて、その最後の方でアーカイブを書く。私としては、アーカイブは環境省の HP で十分で、あれは膨大な内容でまとめようが無い。どこに着目して書くかのニュアンスが、私個人は他の先生方とちょっと違う。

関委員）本文と参考資料みたいな構成にされるとすると・・・これは意思の表出なので主張がそこに有る訳である。アーカイブというのは過去の事実の一般周知を促すことだから、その大半は参考資料なので、意見ではない。それも当委員会のミッションだろうが、それを意思の表出の中に収めようとするのは如何か。大部分は参考資料になるのではないか。

岸田幹事）前期までアーカイブを作らしようという提言をする議論が続けてきたが、従来気付かなかった環境省の HP が非常に充実していることが分かり、それで国内事案関係は十分という山内委員のご意見があった。しかし、中国関係事案についての担当室 HP は簡潔であり完全な情報サイトは見当たらない。技術的にはリンクのインデックスを作る方法も検討してきた。そうした提言をやりたいという議論をしてきたところである。

関委員）そういうことを踏まえて提言をする際に、一つの文書の中に意見と事例が一緒になってしまうのはおかしい。それをどう整理するか考えないといけない。

小野委員長）これ迄の今回の意思表出のイメージは報告書に近かったように思う。

関委員）近年査読が厳しいのも、単なる専門委員会の報告ではなく、日本学術会議として意見を発信していくということを念頭に厳しいのかなと考えている。だから寧ろ目次案の第2項目の方の課題をどういう風にまとめて表出するかがかなり重要だろう。それにも強弱があって、ハルバ嶺処理完了しても未処理の物があるとか、横田先生のいわれるガバナンス体制について前に出すとか。只並べるのではなく、それがこの委員会としての主張では。中国で残された課題は多いと思うが、今この委員会が主張すべきことは何なのか。2027年以降の事業を誰が主体となり続けるか今から考えた方が良いとか、何を主張するかは委員会のミッションとして重要なんだけど、そこは余り議論していないのでは。

山内委員）全く同感で、そろそろ各論に入らないとまとまらない。この提言書は第2項目ありきで、第1項目はそれの資料である。最終的に社会が、この事業が必要なのが第2項目。巨額の国費を費やしてきたこの事業の、今後また幾ら投じることになるのか。それを知恵を使って削減するのが我々のミッション。良い資料を作っておけば経費節減に役立つかもしれない。日本国の将来の節税のためにこの委員会で科学者が意見をまとめておかなければいけないというのが私の意見。そういう提言書に参加したい。

横田委員）アーカイブ構想の発案者として当時の提案趣旨を述べると、当時はアーカイブ案に比肩する環境省のウェブサイトの存在を実は知らなかった。私が担当室在籍時期は未だ環境省の仕事が始まっておらず不勉強だった。問題意識にあったのは、日本国内では当然ながら住民対策を結構綿密にやっている。その経験が、国内のちゃんとしたアーカイブがあればきちんと蓄積されるのではないかという意識がありました。そういうものがあれば恐らく中国のいろいろな所で事業をやるときの周辺の住民対策にも参考になるのではな

いかという意味で、国内での事業と中国での事業と同じような組織が、同じように情報が共有できることが意味があるのではという意識でアーカイブを提案した次第である。

小野委員長）そろそろ時間なので、次回迄に何をして何を宿題とするかを決めたい。

山内委員）未だ正直、どういうものを作るかというイメージが落ちてこない。これ迄のアプローチは少々変えないといけない。安全工学シンポジウムには出ないで、執筆プラットフォームをしっかりと作って、ここからは共同作業ではないか？

岸田幹事）目次案の第1項目は全部付録にする位に扱いで、第2項目で目次を作り直し、2週間位で執筆プラットフォームの形にして、皆様と共有する作業を行うことで良いか。

小野委員長）それで良いと思う。いつ位迄にできるか。出来たら皆さんの意見を集めて、書きたい部分に手を挙げて頂く。或いは委員長として指名することがあるかもしれない。

山内委員）最終的には委員長名が出るので、委員長が指名して頂くのが良いと思う。

小野委員長）ありがとうございます。そういう進め方で出来ればと思います。

4) その他

次回は1月末までに執筆プラットフォームの共有後、作成進捗状況を勘案しつつ3月末前後を目途に開催するよう日程調整することとした。

全ての議事を終了したので、小野議長は閉会を宣した。

以上